

AI 管理のスマート農業で中山間地の里山再生

広島産キャベツ 100ha 栽培めざす実証実験を 11 月 25 日に

1 概要～庄原市東城町のキャベツ農場で実験と説明会

県立広島大学の庄原キャンパス（広島県庄原市七塚町 5562）では、「キャベツの大規模経営モデル」に県など関係機関が位置付けている庄原市内の農場（庄原市東城町帝釈宇山 390）で 11 月 25 日、スマート農業の実証実験を行います。農業生産法人の（株）Vegeta（谷口浩一社長）が保有する 75ha（ヘクタール）のキャベツ農場で、スタートから 5 年ほどで、中国地方で最大規模の農場に成長しています。さらなる規模拡大を目指し、まずは農場を 100ha 以上とすべく、AI や IOT を駆使した「スマート農業」の実現を進めます。作業の効率化と省力化が目的で、当日はドローンによる農薬散布、機械化が難しいといわれてきたキャベツの、専用機器による全自動の収穫作業などの実験を公開します。

農場内では、スマート農業に使う機器やシステムを解説するパネルを展示。農場で生産したキャベツを使った「焼きそば」や、イノシシの肉を使った「猪汁」も販売します。また農場近くの集会所では、実証内容の説明会も開催します。

2 背景～「山間地のキャベツ生産」は県の重点品目

県が作成した「農林水産業アクションプログラム」では、重点品目の一つにキャベツを掲げ、スマート農業の推進による生産量拡大を目指しています。県のソウルフードでもある「お好み焼き」でも親しまれているキャベツは、県内需要に対し県産の流通量が圧倒的に不足しています。県では令和 2 年度に県内需要（約 4 万トン）の過半以上を占める 2 万 2 千トンの供給を目指しています。

一方、県の 4 分の 3 は中山間地域で、狭小な農場が点在しています。標高差が大きいという特徴もあります。そうした「地の利」を活用し、作付面積を全県に拡大できれば、キャベツの通年での安定供給が可能になり、他の生産地の閑散期に出荷することも可能になります。全県に散らばる小さな農場を、スマート農業で集約して管理できれば、飛躍的な供給量の拡大が期待できます。25 日の実証実験はその足掛かりとなり、県立広島大学の三苫好治（みとま・よしはる）教授が代表者を務め、庄原商工会議所が進行管理を担います。

3 11 月 25 日のスケジュール

① スマート農業実演（午前 11 時～午後 2 時）

場所：（株）Vegeta 農場（庄原市東城町帝釈宇山 390）

内容：ドローンを使う農薬散布、オートトラクターによる自動操舵の畦立て実演、全自動移植機によるキャベツ定植と収穫作業、リモコン草刈機の実演他。

② 事業概要説明会（午前 11 時 20 分～午後 3 時）

場所：宇山自治公民館（庄原市東城町帝釈宇山 390）

内容：キャベツの機械化栽培

スマート農業を取り巻く環境など

*取材ご希望の場合はお問い合わせ下さい。



Vegeta の農場（同社 Facebook から）